

農業ふれあい公園だより No.18

2011
March

【岩手県農業ふれあい公園 農業科学博物館】岩手県北上市飯豊 3-110 TEL0197 - 68 - 3975



むかしの刈ったイネから実
(米)をわける道具はこれだ!!



スクリーンでむかしの
イネづくりをみました。



田んぼはふしぎな
力があるんだなー



この野菜は何科の
食べもの？

岩手県立農業ふれあい公園・農業科学博物館には、江戸時代後期から昭和 40 年頃までに農作業や農業生活で使用していた用具など、約 4500 点の資料が収蔵されています。

博物館では、収蔵資料の保守管理のほか、第 1 展示室「農業れきし館」では、県内の農具や生活用具を展示して、かつての農村の歴史、くらしや地域農業の発展につくした人々を紹介をしています。

第 2 展示室「農業かがく館」では、子どもたちが、農業博士の研究室の田んぼと冷蔵庫、牛の体の中をイメージした部屋にあるゲームやパソコンにふれながら学習し、科学の目で見た農業の不思議や岩手の農業が理解できるようになっています。

平成22年度 企画展レポート

第44回 ^{どりょうこう} 度量衡と交易～長さ、容積、重さをはかる～

平成22年4月8日～6月30日



人間は道具や小屋を造るため長さをはかるようになり、農耕が始まると食糧などの生産物の交換や販売、あるいは租税として取り扱いする場合には、不正や不公平が生じないよう「度(ものさし)」「量(ます)」「衡(はかり)」といった用具が考案されました。

日本には、中国、朝鮮半島から度量衡が伝わり、701年(大宝元年)に定められた「大宝律令」が日本の度量衡の始まりとされています。

今では日常的に使われている「メートル」という単位が登場したのは、1789年のフランスで産業革命により産業が飛躍的に発達したことを背景に登場しました。

1885年(明治28年)には日本も国際条約である「メートル条約」に加盟しました。

さらに、1960年(昭和35年)の国際度量衡法総会において全世界で共通する新たな単位系として、「国際単位系(SI)」が採択され、国際的に度量衡が統一されていく流れにあります。

しかし、日本では「尺」という長さの単位が建築や裁縫に根強く使われ、日常的に残っており、現在でも古い度量衡が残っているのは、それぞれの国や民族の生活、文化と切り離せない歴史があると考えられます。

企画展では、当館の収蔵品を主体に「取引きの基準や交易に使われた用具類」を展示、紹介しました。



第45回 森の恵み ～木の実と山菜、きのこ～

平成22年7月4日～9月30日

木の実食は縄文時代から行なわれ、東北地方では縄文中期にはトチ、ナラの堅果が主要な植物質食料となっています。住居の遺跡から発掘された複式炉からは、当時の人々が「アク抜き」技術を持っていたことが明らかになっています。

また、八戸市の是川遺跡の特殊泥炭層からはクルミ、トチ、ナラの木の堅果が発掘されています。特殊泥炭層とは、遺跡の人々が食料にした果実の殻を水中に投じたものが堆積して出来たもので、この中に原型をとどめた木の実がのこっています。

企画展では、木の実の堅果やその加工工程、加工に使用した昔の用具などを展示するとともに、あわせて山菜、きのこについても簡単に紹介しました。



第46回 むかしと今の稲づくり ～技術の移り変わり～

平成 22 年 10 月 5 日～12 月 26 日



昭和中期頃までの稲づくりは、人力や畜力を中心に行われていましたが、昭和 35 年頃から牛馬耕に代わって耕うん機などエンジンを使った農機具が登場しました。

また、耕うん機のほか、除草剤の使用(25 年頃から使用)、動力噴霧機による薬剤散布など、労力軽減技術の開発によって、生産性の向上が見られました。

その後、田植機をはじめ、バインダーやコンバインなどの刈り取り機、さらには薬剤散布や溝切り管理を行うための乗用管理機などが相次いで実用化され普及したことにより、稲作の機械化、省力化が急速に進みました。

現在では、自脱型コンバインで刈り取り、生籾をライスセンターやカントリーエレベーターに運んで乾燥、貯蔵し、販売用に調整して共同出荷されるなど収穫から集荷、流通の仕組みも大きく変わりました。

企画展では、写真による昭和 30 年～40 年代と現在の作業風景の比較を中心に、むかしと今日の稲づくりを紹介しました。

第47回 岩手のダイズ ～昔の栽培技術と加工法～

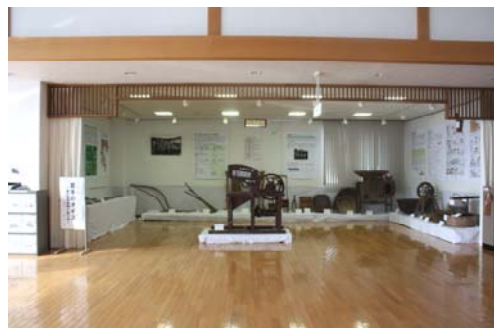
平成 23 年 1 月 9 日～3 月 31 日

県北地域では、昭和 30 年代に食料増産の開田工事により水田での稲作が地域全体に広がりましたが、それまでは自給のための畑作物栽培が中心でした。

主な栽培作物はヒエ、ムギ、ダイズで、ヒエムギーダイズの 2 年 3 毛作栽培が広く普及していました。

ダイズは現在も重要な畑作物として栽培され、岩手県の平成 21 年度の栽培面積は水田転作を含めて 4,680ha で、5,760t が生産されています。

企画展では、現在栽培されているダイズの品種、江戸時代のダイズ栽培技術や昔の農具、ダイズの加工法や加工用具などを紹介しました。



博物館・公園トピックス

〈農の生け花展〉



平成 22 年 9 月 3 日～4 日農業研究センター参観デーの開催に合わせ、県内の農の生け花愛好者グループの方々が当博物館を会場に農の生け花展を開きました。野菜や草花を持ち寄り、農具の荷かごや五升杓、鍋などを花器に、トマトやトウモロコシ、秋のおとずれを思わせる稲の穂やススキで 19 点を飾り付け、季節の移り変わりを現わしていました。

来館者からは、生活感や豊作への願いが感じ取れる作品だ!!と大変好評でした。



親子で体験!

「お正月の松飾りをつくってみよう!」 平成 22 年 12 月 26 日(日) 開催

年の瀬も押し迫った 12 月 26 日、小学生 4 年生～6 年生と保護者を対象に「冬休み体験学習会」を開催しました。

参加者は、北上市と花巻市の親子 9 組(子ども 9 名、保護者 8 名)で、講師の菅原兼男さん(91 歳)に指導を受けながら「松飾り」をつくりました。

菅原さんから、わらの選び方や、より合わせの手ほどきを受け、協力しながら縄を作り、これを輪にして、紙垂(かみしで)や、みかん、松の小枝、笹竹などを飾り付け、完成させました。

最後に、子ども達が出来上がった松飾りを前に捧げ持ち、先生を囲んで記念写真を撮り、早く家に帰って飾りたいと笑顔で家路につきました。



48 回 企画展のお知らせ

農業改良普及事業創成期の技術資料

～手書きの巻物～

平成 23 年 4 月 5 日～6 月 30 日

第二次世界大戦後、革新的な農業技術の発達があり、農地改革や農業研究機関と普及組織が一元化され、技術指導は、農協を中心とする農業団体と共に行われ今日に至っています。

この企画展では、殺菌・殺虫剤や化学肥料が使い始められた昭和 28 年当時に、岩谷堂普及所(現奥州農業改良普及センター)で農業技術指導に使った「手書きの巻物」資料を紹介します。

